2月2日の説教要旨　　「全ての民の祈りの家」　　山本一牧師

マタイによる福音書　21章12～16節

●イエス様がこの世にもたらしたものといえば、愛や平和、希望などを思い浮かべます。しかし、今日の聖書箇所は驚きです。あの愛に満ちたイエス様が、エルサレム神殿の境内で商売をしていた人々の台や椅子を倒されたというのです。
ここで使われている「倒した」という言葉には、ギリシャ語の「カタストレフォー」が使われています。この言葉は、英語の「カタストロフィー（破滅・大変動）」の語源となった言葉です。ある意味、イエス様は神殿に「破滅」をもたらしたのだと福音書は告げています。では、なぜイエス様はそのようなことをされたのでしょうか。ただ単に、神殿で商売をしているのが気に入らなかったからではありません。
●イエス様は、預言者イザヤの言葉を引いてこう言われました。
「わたしの家は、すべての民の祈りの家と呼ばれるべきである。」
当時の神殿には、障がいを持った人々は入ることができないという考えがあり、外国人が入れる場所も厳しく制限されていました。特に問題だったのは、ユダヤ人だけが入れる内庭は祈りの場として静かに保たれていたのに対し、「異邦人の庭」と呼ばれる境内では、ユダヤ人のための生贄の販売や両替が行われ、雑然とした場所になっていたことです。イエス様が神殿で机をひっくり返されたのは、神の神殿をユダヤ人だけのものではなく、神を求めるすべての人に開かれた場とするという壮大な目的があったからです。
●イエス様はまさに命がけで、異邦人や障がい者を含むすべての人々が受け入れられ、共に礼拝できるように「カタストロフィー（大変革）」をもたらされたのです。そして、教会という場所は、常にそのような神がもたらす大変革を受け入れるように導かれてきました。異邦人への救いから始まり、人種差別の撤廃、性的マイノリティの方々への差別からの解放など――そのために命がけで戦ってこられた先達の働きは、常に固定化された「人間の考え」を打ち破り、「わたしの家は、すべての民の祈りの家と呼ばれるべきである」という主の思いを実現するための戦いだったのです。
●今朝、覚えたいのは、イエス様の「カタストロフィー」は、私たちの心にこそ与えられるということです。本当に大変革が必要なのは、私たちの心なのです。異なるものへの恐れ、偏見や差別心はなかなか拭えません。しかし、「イエス様が、他ならぬこんな私のために命がけで戦ってくださった」ということを思うとき、私たちの頑なな心は主によって変えられ、違いを受け入れ合い、共に主を礼拝する者とされていくのです。
伊丹教会がこの地域において「すべての民の祈りの家」となるように祈りつつ、共に宣教の働きに励んでまいりましょう。